

都林泉名勝図会跋

六条河原院のおもしろきさまは、古きうたどもにいちじるく、荒たる趣もまた哀に聞ゆ。源順の、人物はかはれども、煙霞はかはらず。時世はあらたまれども、風流改らずと賦せられし、其煙霞風流も、名残なき籬が島の古き蹟に棲て、いにしへをしたふからに、猶こ、かしこを思ふに、寛平法皇の亭子院の御園、中川の水せき入れし上東門院のわたどの、やり水、鳥羽の離宮祭主輔親卿の天橋立なども、唯名のみなるは悲しされば、今さだかに遣れる所を見ぬ人にも、しらせまほしく、画工をいざなひて、露たがはずうつさしめ、目て都林泉図会といふ。夢窓国師の石に漱ぎ、ながれに枕し給ふあと、相阿弥が海山を縮め、僊家の自在に倣ひし所をはじめ、やごとなき御あたり、たうとき御寺のくまぐをも、ゆかりに随ひつゝ、これをうつし絵にし。王摩詰が、林泉の図をみて、鬱をひらきしためしをも顧ふて、魴尾にしるし侍るものならし。

寛政十一載仲夏

平安 秋 里 籬 島 湘 夕